

「イチカ、バチカ」

作 .. 泰雅

## ○ 梗概

大学受験を控える高校三年生の戸山市果（17）は、父の逮捕により学校に通いづらくなっていたが、担任の麻美の計らいで特別学級『0組』で過ごすことになる。いじめを看過し学級崩壊させたという過去を持つ麻美は、不登校の生徒が出ることを極度に恐れていたのである。

そこへ、発達障害を持ち、大阪の高校でいじめに遭っていたという八家桃が転校してくる。桃は面倒見の良い市果にすぐに心を許し、同じく0組に通うことになる。0組では、通常通り授業を受けることはできていないものの、市果と桃は楽しい時間を共有していた。

教頭の吉田は仕事熱心な麻美に感謝しつつも、勉強に集中できていない市果の現状や、疎かになりつつある麻美の本来の業務への懸念などから、0組の解散を切り出す。しかし、麻美は受け入れない。

そんなある日、桃は市果の父の逮捕をニユ

―スで知る。それを無邪気に市果に話したせいで、二人の心に距離ができてしまう。同じ教室で過ごすも、会話もない。桃は、自分が市果のことを何も理解できていなかった現実を突きつけられる。一方、市果は、普段と違い勉強を黙って見守る桃の優しさを感じていた。

休日。市果のもとへ、麻美が訪れる。0組の存続に不安を感じている麻美は、自身の過去の過ちを打ち明け、0組は楽しいかと市果に問う。父の逮捕を受けて自分を責めていた市果は、桃と過ごせたおかげで笑顔になれたと麻美に感謝し、0組を続けたいと話す。

週明け。市果と桃は自分たちの名前に似ている「一か八か」という言葉をきっかけに、これからも共に頑張ろうと決意する。そこへ麻美も登場。市果と桃がきちんと授業を受けられる状態にすることで、0組を続けられることになったと告げる。一連の出来事で、さらに絆を深める市果と桃であった。

○ 登場人物

戸山 市果 (17) 高校三年生

八家 桃 (18) 高校三年生

大迫 麻美 (27) 教師

吉田 博 (55) 教頭

八家 ルミ (44) 桃の母

戸山 雅子 (48) 市果の母

戸山 雄治 (48) 市果の父

用務員

女子 1

女子 2

教師 1

教師 2

教師 3

教師 4

アナウンサー

○アパート・前（夕方）

止まっているパトカーの背面。

後部座席の男（雄治）の頭部が見える。

後ろで立ち尽くす二人の女（市果、雅子）の背中。

パトカー、ゆっくりと去っていく。

○高校・校門（日替わり）

校門に『久村学園高等学校』の文字。

一台の青い車が入っていく。

教師1の声「問題用紙が二枚と解答用紙が一

枚、足りないところは手を挙げて」

教師2の声「カンニングしたら全科目零点だ

からな」

教師3の声「机の中は空っぽにしなさいよ」

教師4の声「やっと中間テストも終わりだ、

最後まで諦めんじやないぞ」

○同・校舎・外観

チャイムが鳴って。

教師たちの声「よーい、始め！」

テスト用紙を一斉に裏返す音がする。

○同・0組教室・中

チャイムの余韻が聞こえている。

床に、トランプ遊び・スピードの開始  
直前の状態で、四枚ずつ表向きのカードが並べられている。

その横にある山札のカードをめくろう  
と構える、二本の手（桃と市果）。

桃の声「（関西弁で）よーい、始め！」

一方の手（桃）、カードの端を掴む。

市果の声「待って待って待って。トイレ行ってくる」

めくりかけていた手（桃）、止まる。

桃の声「えー、またあ？ ひっこいなあ」

市果の声「ごめんごめん、すぐ戻るから」

○同・同・前々廊下

教室から出てくる戸山市果（17）。

ドアに『3年0組』のプレート。

市果、廊下を歩いていく。

○同・校舎・前

停車した青い車から出てきて、校舎に向かっていく八家ルミ（44）。

○同・0組教室・中

窓に犬やライオンなど動物の切り絵、壁に折り紙の鶴や飛行機などが多く飾られている。

机は中央に二つしかない。

日の当たる窓際、床に広げられたトランプの前に座っている八家桃（18）。

ふと大きくクシャミをして。

桃「あかんあかん、なんか寒いわあ」

足元にあった本に手を伸ばし、取る。

葉の挟みであるページを開いて読む。

表紙に『3歳から始めるトランプ遊び』とある。

桃「（読んで）『スピード』は、シンプルなルールで誰でも楽しめます。大人数を前提とするゲームが多い中、たった二人だけで楽しめる、逆に言えば二人でしか遊べないのが最大の魅力です」

桃、本を閉じて苦笑して。

桃「なんやそれ。逆ってなんやねん……」

桃、また大きくクシャミをする。

○同・女子トイレ・前々廊下

市果、濡れた手を払いながら出てくる。

階段の前あたりに歩いてきて。

ルミの声「（関西弁で）あ、市果ちゃん！」

見ると下の踊り場、手を振るルミ。

ルミ「こんにちは〜」

市果「！」

市果、慌ててシートと唇に指をやる。

ルミ「え、何？　なんでシーなん？」

市果「おばさん、テスト中、テスト中！」

ルミ「（小声で）あ、ごめんごめん、せやっ



たな」

ルミ、階段を上がってきて。

ルミ「桃は何してん？」

市果「はっちゃん、教室で待っていてます。

…：あっ、今、スピードしてて」

市果とルミ、廊下を歩きながら。

ルミ「スピード？」

市果「トランプゲームです。三回やって三回

とも負けました私」

ルミ「桃、トランプは得意やからなあ」

市果「五連敗したら私ジュース奢りって」

ルミ「ごめんなあ。でもほんま、市果ちゃん

おってくれて助かるわ。前の学校やったら

桃、ずっと一人やってんで。家帰ってもい

っつも市果ちゃんの話ばかり」

市果「（苦笑して）…：今日お迎え早いです

ね」

ルミ「せやねん、パート早よ終わったんよ。

まだおれる言うてんのに店長さん、お客さ

ん少ないから帰ってーて。おっかないわあ」

そのとき、横の教室のドアが開いて。

ドアには『3年5組』のプレート。

顔を出す大迫麻美（27）。

麻美、大袈裟にシートとやる。

市果「！」

ルミ「（小声で）せやった、ごめんごめん」

○同・0組教室・前々中

歩いてくる市果、ルミ、麻美。

ルミ「テスト中やのに悪いなあ」

麻美「いえいえ、担任ですから」

ルミ「先生にはほんま頭が上がらんわ。ごめ

んなあいつも」

麻美「（いえいえ、と頭を下げる）」

市果、ドアを開ける。

教室の中の桃、顔を上げる。

市果「はっちゃん。お母さん来たよ」

桃「（ぼそっと）ゲッ、オカン」

× × ×

中、スピードで遊んでいる市果と桃。

立っているルミと、壁際の麻美。

麻美、壁の折り紙たちを見ていて。

ルミ「桃、そろそろ帰るで」

桃「えっ、もう帰るん？」

ルミ「帰りたいないんか」

桃「帰りたいないわあ、せっかく盛り上がった

きたトコやのに。今ウチ四連勝やねんで。

あ、そうや、オカンもやる？ ババ抜きし

よや」

ルミ「お母さん疲れてんの。早よ帰るよ」

桃「……はい」

桃、しぶしぶ立ち上がる。

市果「はっちゃん、バイバイ」

桃「いっちゃんも一緒に帰ろうや」

市果「ダメダメ、私今から勉強だから」

桃「ふーん。毎日エライなあ」

市果「ふふ、そう？」

桃「そらそうや。ウチ、この世で勉強が一番

嫌いやねん。（小声で）ちなみに二番目は

オカンの小言」

ルミ「聞こえてんで」

桃「ほな、また明日な、バイバイ」

市果「気をつけてね（と手を振る）」

麻美「八家さんさようなら」

桃とルミ、出ていく。

すぐに、廊下から顔だけ出す桃。

桃「いっちゃんバーバイ！」

市果「（関西弁で）早よ帰れい」

桃、クシャッと笑って、去っていく。

聞こえる桃の大きなクシャミ。

市果「（微笑んで）」

市果、トランプを片付け始める。

麻美「（壁を見て）これも八家さんが？」

壁には折り紙のカブトムシとクワガタ。

市果「はい。昨日テレビで見たとかで、朝か

ら張り切って」

麻美「何回見ても器用ね」

市果「ほんと」

麻美「うん……あ、ごめん、先生行くね。ま

た後で」

軽く頭を下げる市果。

麻美、出ていく。

○同・5組教室・前

麻美、歩いてくる。

ドアの前でフツ、フツと息をつき、開ける。

○同・校門

校門を出てくる青い車。

運転席にルミ、助手席に桃。

助手席の窓は開いていて、桃、顔を出して校舎を見上げていて。

桃「あと一回勝ったらジュースやったのにな

あ」

ルミ「落ちるよ。危ないから閉め」

○同・0組教室・中

市果、机で教科書やノートに向き合う。  
ノートに素早くペンを走らせる。

チャイムが鳴って。

市果「（ふと顔を上げて）……」

○同・5組教室・前ノ廊下

教室内からざわめきが聞こえる。

答案用紙の束を抱え、出てくる麻美。

階段を上がってくる吉田博（55）。

吉田、麻美に手招きして。

吉田「ああ、大迫先生。ちょっと」

麻美「？」

○同・校長室・中

応接デスクを挟んで座る麻美と吉田。

吉田「お忙しいところすみません」

麻美「とんでもない」

吉田「三年五組の担任として、我が校の教員として、大迫先生はとても立派に働いてく

れております」

麻美「……」

吉田「毎朝一番に出勤しては職員室の観葉植

物に水をやり、事務作業をこなすスピードも速い。デスクも常に整理しておられる。生徒たちからの信頼も厚く、教頭の私や校長から見ても申し分ない存在です」

麻美「あのこれ、なんの――」

吉田「（手で遮って）もちろん、仕事ができるに越したことはありません。給料分以上に働いてくれることに、本来なら感謝しなければならぬ。しかし、ちよつと働き過ぎと言いますか……」

麻美「0組の件ですか」

吉田「ご存じなんですね」

麻美「ええ、風の噂で。快く思っていない教員や保護者がいるって」

吉田「それなら話が早い。0組を辞めて……解散して、五組の担任に専念しませんか」

麻美「（えっ？ と）……」

吉田「戸山市果さんが不登校になりかけたとき、臨時の特別学級として0組を作るというあなたの案に、私は当初賛成でした。ナ

イスアアイデアだと感心しました。大迫先生  
自らが担任を名乗り出てくれて、それなら  
安心だと思いました。しかし、現実はその  
甘くない」

麻美「……」

吉田「0組の生徒が戸山さん一人なら、問題  
ないと思います。時々様子を見に来て、勉  
強の進み具合を確認すればいい」

× × ×

0組教室。勉強している市果。

吉田の声「彼女は心配無用です。放っておい  
ても勉強に励む。今回はたまたま家庭の事  
情があっただけで、元々手のかからない生  
徒です。周囲の空気が落ち着いてきた頃に、  
元の五組に戻ればいい。三年生は特に敏感  
な時期ですから、戸山さんや他の生徒の大  
学受験を考えても、それが波風を立てない  
最善策です」

× × ×

吉田「しかし、八家桃さんが転校してきた。



彼女は大阪の学校で通常学級に在籍していましたが、自らの発達障害がきっかけでイジメにあっていた。状況を変えようと、三年生のこの時期ではありますが、お母様が思い切って転校を決められた」

麻美「ええ。仕切り直して関東で、と」

吉田「彼女は、本当は五組に入る予定だった。ただ、幸か不幸か、本校には0組があった。八家さんは戸山さんにすぐに心を許し、0組に通うことになった」

麻美「その通りです」

吉田「これがどういふことか分かりますか？」

麻美「……はい？」

吉田「0組が、簡単に無くせるものではなくなったということです。もう、戸山さんと大迫先生だけのものではないんですよ」

麻美「……」

吉田「0組の世話に時間を取られ、五組の担任業務が疎かになっているのではないかと、ある保護者からご指摘を受けています」

麻美「世話って。私は担任の仕事をしているだけです」

吉田「あくまで五組がメインでしょう。0組は臨時の特別学級に過ぎない。メインの仕事が最優先です」

麻美「（ぼそっと）メインって」

吉田「他にも、転校生を特別扱いしているのではないか、などの声もちらほら。この状況では、戸山さんの受験にも悪影響を及ぼしかねない」

麻美「彼女は上手くやっています。八家さんがいる時間帯は一緒に遊んだり簡単な勉強をし、八家さんが帰ってからは一人で真剣に勉強に励んでいます」

吉田「保育士のような役割に追われ、勉強時間が減ってしまう戸山さんの負担を考えたことがありますか」

× × ×

町を走っている青い車。

ルミと桃、何やら笑顔で話している。

吉田の声「今ならまだ間に合います。八家さんのお母様に、戸山さんと共に五組に戻ることを提案して、0組は解散しましょう。戸山さんには時期尚早かもしれませんが、仕方ありません」

× × ×

麻美「……できません」

吉田「担任の掛け持ちなど、時間的に不可能だったんです」

麻美「彼女たちは小学生じゃないんです、常に監視しないといけないわけではありません……時間のやりくりが下手なのは、未熟な私の責任です。早急に見直します」

吉田「しかし、特に八家さんはずっと——」

麻美「0組は辞めません。何を言われても続けます。中途半端な気持ちなら、最初から始めていません」

吉田「ですから——」

麻美「私は……私はまだ教師生活五年目ですが、様々な理由で学校に行けなくなった生

徒を見てきました」

× × ×

回想。教壇にて呆然とする麻美。

麻美の声「彼らに共通していたのは、逃げ場がなかったことです。精神的な逃げ場です」

座る生徒たちの中、三つある空席。

麻美の声「居場所をなくした子どもたちは、学校を離れるしかなくなります」

× × ×

麻美「私は、彼女たちにそうなってほしくない。0組という逃げ場が、今の戸山さんや八家さんには必要なんです」

吉田「しかし——」

麻美「続けさせてくださいお願いします」

麻美、立って、乱暴にドアを開け出ていく。

吉田「（考えるそぶり）……」

○同・資料室・中（夕方）

参考書や赤本だらけの資料室。

市果、棚の前で参考書をめくっている。

複数の足音と喋り声が聞こえてきて。

慌てて奥の棚の陰に隠れる市果。

市果「（息をひそめて）……」

入ってくる女子1と女子2。

女子1「テスト終わってすぐ勉強とか」

女子2「ウチらいつから真面目になったの？」

女子1「あー、辞めたすぎる」

女子1と女子2、本をいくつか取り。

女子2「受験終わったらフェス行きまくって

やる」

女子1「それ最高」

女子1と女子2、出ていく。

市果「（ハア……と息を吐く）」

○タイトル「イチカ、バチカ」

○（回想）高校・0組教室・中

マジックで大きく『八家桃』と書かれ

た画用紙を掲げている桃。

首を傾げて見ている市果。

市果「ハチカ？」

桃「は？」

市果「私トヤマイチカって言うの、イチカとハチカだね」

桃「ううん、ちゃうよ。ウチ、ハチヤモモ。

よろしくやで」

市果「ハチヤね。うん、よろしく」

市果と桃、力強く握手する。

○（回想戻り）市果の家・ダイニング（夜）

アパートの一室。

キッチンでスマホを触っている市果。

カレーを煮た鍋がグツグツしている。

スマホ画面、『戸山市果』『八家桃』

と書いたそれぞれの画用紙を掲げる市

果と桃のツーショット。市果は笑顔で、

桃はクシャミ直後の間抜けな顔。

市果「（微笑んで見て）クシャミ……」

鍵の開く音がして、入ってくる戸山雅

子（48）。

雅子「ただいま」

市果「お疲れ様。カレー作ってるよん」

雅子「おお、ありがと〜助かる〜」

市果「先にお風呂、（関西弁で）入ってきてい

雅子「（笑って）うん、そうする」

× × ×

居間でカレーを食べている市果と雅子。

雅子「うん、やっぱり市果、天才かも」

市果「天才？」

雅子「料理の」

市果「ホント？」

雅子「もうお母さん超えられたわ」

市果「私にそんな才能があるとはね」

雅子「ね。ずっとお母さん家にいたら気づけ

なかつたかも」

市果「……だね」

テレビ、ニュース番組の始まる音。

アナウンサーの声「皆さんこんばんは、ニュ

ースのお時間です」

市果、素早くリモコンで電源を消す。

雅子「……おかわり、しちやおっかな〜」

市果「（引きつった表情で）うん、して」

○同・市果の自室（夜）

市果、机で数式を書いて勉強中。

ふと顔を上げて。

机の上に写真立て。高校の入学式の写

真、立て看板を挟んで笑顔の市果、雅

子と、誇らしげな戸山雄治（48）。

市果「（ぼんやりと見つめて）……」

写真立てを下向きに倒して。

数式の続きを書いていく市果。

○高校・0組教室・中（日替わり、朝）

壁時計は七時五分。

麻美、雑巾で黒板を拭いている。

黒板の隅に『日直…いちか ばちか』

とある。

その上に『10月18日（金）』と書



き入れる。

そこへ、市果、ドアを開け入ってくる。

市果「おはようございます」

麻美「戸山さん。早いね」

市果「勉強、したくて」

麻美「……そう」

市果、着席し、カバンを開ける。

○同・校舎・外観

チャイムが鳴る。

○同・0組教室・中

市果、一人で勉強している。

壁時計に目をやって。九時十分。

ドアが開き、入ってくる麻美。

麻美「えっ、八家さんは？」

市果「まだ来てないです」

麻美「どうしたんだろ……ちょっと職員室聞  
いてくる」

麻美、出ていく。

○同・校門

走って入ってくる桃。

ハアハアとかなり呼吸が激しい。

○同・0組教室・前々中

走ってくる桃。

ドアを開けて教室に入って。

桃「（肩で息をしながら）」

中、勉強中の市果、ハツとして。

市果「どうしたの、はっちゃん」

桃「いっちゃん、おはよ……」

市果「おはよう。遅刻？ 何してたの」

桃「聞いて。あんな……あんなあ、駅前の図

書館行ってん」

市果「図書館？ なんで」

桃「調べたいことあって」

市果「？」

桃「朝車乗ってるときにラジオで聞いて……

嘘やろって思ってたんだけど、聞き間違いやろ

って思ってんだけど。勘違いやったらそれはそれで良かったん。とにかくどうしても自分の目えで確かめたかったから。オカんに送ってもらった後こっそり学校抜け出して、図書館行って、新聞見てきてん」

市果「……なんの話？」

桃「なあ、いっちゃん。逮捕された戸山物産の社長って、いっちゃんのオトン？」

市果「（動揺して）……」

× × ×

回想。夕方、アパートの前。

呆然と立ち尽くす市果と雅子。

パトカーが止まっていて、後部座席にいる雄治。

市果「お父さん……」

発進し、去っていくパトカー。

× × ×

市果「（動揺して）……」

桃「なあ、どうなん？ いっちゃんのオトン、なんか悪いことしたん？」

市果「……」

桃「詐欺容疑って書いててんけど、ウチ難しいこと分かんねん。なあ、教えてよ。いっちゃん教えて？ オトン何したん？ なんで黙ってるん？」

市果「……」

桃「ウチさ、普段ニュースとか全く興味ないのに、珍しく気になってんねん」

市果「……」

桃「悪いことしたから捕まったんやんな？」

市果「……」

桃「何したん？ ウチ、知りたいねんけど」

市果「……（小さく）関係ない」

桃「なんて？」

市果「あんたには関係ない！！」

市果、立ち上がり、ドアの方へ。

ドアの外、呆然と立っている麻美。

麻美「……戸山さん？」

市果、麻美を見て一瞬止まるも、無視して去っていく。

桃「（ぼそっと）あんたって初めて言われた。  
はっちゃんやのに」

○同・5組教室・前

足早に歩いてくる市果。

中から授業のざわめきが聞こえる。

市果「（立ち止まって）……」

と、ドアのプレートを見てから、通り  
過ぎていく。

○同・0組教室・中

桃、机で折り紙をしている。

大きくクシヤミをして。

桃「あかん、今日も寒いわあ」

壁際に立っている麻美。

桃「なあ、先生。なんでいっちゃん出て行っ  
たんやろ？」

麻美「八家さん……」

桃「またトイレかなあ。あ、見て、できた」  
桃、折り鶴を麻美に見せる。

麻美「……上手ね」

桃「ウチな、いっちゃんのこと全然知らんねん」

麻美「……」

桃「だっていっちゃん、ウチみたいにアホじゃないし、勉強もあんなにできるやん。0組における理由なんかはないはずなのに、なんでかウチと同じクラスや」

麻美「……」

桃、また折り紙を始めて。

桃「先生黙らんといてや、こういうときは喋らんと」

麻美「……そうね」

桃「先生は、なんでやと思う？」

麻美「え？ ……それは」

桃「なんでウチに、あんなに優しくしてくれ  
るんやと思う？」

麻美「えっ？」

桃「ウチ知ってるで。いっちゃん、たまに朝  
早よ来て勉強してんねん。帰りも遅おまで

残って勉強してんねん。ウチがおったら集中できひんもんなあ」

麻美「……」

桃「いっちゃん今日は勉強してええよって言うおうと思って学校来ても、会ってもたらウチ遊びたなんねん。いっちゃんおもしろいから、遊びたなんねん……甘えてまうねん」

麻美「……八家さん、あのね」

桃「ほんまごめんやで。あ、できた」

桃、できた兜をポカンと見つめる。

麻美「……探してくるね」

麻美、ゆっくりと背を向けて。

○同・屋上手前

最上階の階段の踊り場。

屋上へと繋がるドアに南京錠が付いている、そのドアにもたれて座っている市果。

市果「（ボーツとして）……」

× × ×

回想。0組教室。

中央に机が一つだけある。

窓の切り絵や壁の折り紙はない。

前方から教室を見渡す市果と麻美。

市果の頭は俯き加減。

麻美「三年0組、ここが戸山さんの新しい教室よ」

市果「……」

麻美「落ち着いたら、また五組に戻ろうね」

× × ×

市果「(ボーツとして)……」

○同・0組教室・中

飾りがいっぱい窓や壁。

机で、真顔で折り紙している桃。

机の上には、鶴や兜など、作ったものが山積みになっている。

○同・廊下く屋上手前

麻美、歩きながら市果を探している。



階段を見上げて、踊り場に座り込みポ  
ーッとしている市果に気づいて。

麻美「……戸山さん？」

市果、ゆっくり麻美の方を見て。

市果「……屋上、行けませんでした」

麻美「え？」

市果「ドラマだったらこういうとき、屋上行  
くのかと思って。でも、鍵閉まってきました」

市果、力なく笑う。

○同・校門（夕方）

帰っていく生徒たちの姿。

○同・0組教室・中（夕方）

机で勉強する市果、絵を描く桃。

市果の机には参考書や教科書が三十セ  
ンチほど積み上げられ、桃の机との仕  
切りのようになっていた。

桃の机の足元には段ボール箱があり、  
中には大量の折り紙の作品。

市果「（真剣に勉強していて）……」

桃「（チラチラと市果を気にして）……」

ドアの外に歩いてくる麻美とルミ。

麻美「八家さん」

ルミ「桃。帰るで」

顔を上げる桃と、勉強したままの市果。

○同・校門（夕方）

校門を出てくる青い車。

運転席にルミ、助手席に桃。

助手席の窓は開いているが、桃、顔を

前に向けポーツとしていて。

ルミ「（桃を気にしてチラ見）……」

桃「あー、今日はあかん一日やったなあ」

車、去っていく。

○市果の家・市果の自室（夜）

ベッドで毛布を被り寝転ぶ市果。

市果「（ポーツと）……」

玄関の鍵が開く音がして。

雅子の声「ただいま〜」

足音近づいてきて、ノックされる。

雅子の声「市果？」

市果「（力なく）はい」

ドアが開いて、顔を見せる雅子。

スーパーの買い物袋を下げている。

雅子「大丈夫？ 熱はない？」

市果「うん。疲れただけ」

雅子「すぐご飯作るから。待ってて」

市果「うん」

雅子、ドアを閉める。

○同・外観（夜）

○同・ダイニング（夜）

テーブルで味噌汁を飲む市果。

市果「……」

○高校・校門（日替わり）

風が強く吹いていて、なびく草木。

○同・廊下

麻美、書類を手に歩いている。

用務員が廊下を掃除している。

用務員「ありゃ、大迫先生」

麻美「どうも」

用務員「休日出勤ご苦労様です」

麻美「（苦笑して）テストの答え合わせ終わってなくて」

用務員「働き者ですなあ」

麻美、微笑んで、ふと窓の外を見て。

反対側の校舎の廊下を歩く市果に気づいて。

麻美「（あっ、と）……」

○同・0組教室・中

窓が少し開いていて、隙間風がヒューヒュー鳴っている。

市果、机でノートを開き勉強中。

市果「享保の改革が松平定信で、寛政の改革

が徳川吉宗……あ、逆か」

風が強くなって、壁の折り紙の飛行機  
が剥がれ、市果の足元に落ちてくる。

市果、気づいて、拾って、眺めて。

市果「（ポツリと）飛行機……」

○（回想）同・同・同

国語辞典を開いている市果、ニヤリと  
して。

市果「ブツブー、ハズレ〜！ 正解は『飛行  
機』でした〜」

ムスツとして頬を膨らませる桃。

桃「いっちゃんの問題、いちいちムズいねん。  
次ウチ出すな、貸してみ」

桃、国語辞典を取って、めくりながら。

桃「んー、なんかええのないかなあ……」

市果「簡単なのでいいよ」

桃「……あ、みつけ、め〜っちゃええのあつ  
た。いくで？」

市果「うん」

桃「（読んで）運を天に任せ、思い切りやってみること。さて、この言葉はなんでしよう！」

市果「え、何それ」

桃「ムズないで。めっちゃめっちゃいっちゃんに  
関係ある言葉やもん」

市果「関係ある？ どういうこと？」

桃「いっちゃんの、名前に関係あるねん」

市果「…名前？ ますます分かんない」

桃「はい、ブー、時間切れ。正解は『イチか  
バチか』でしたー」

市果「うわ、単語じゃないの？」

桃「細かいことはどうでもええねん。市果、  
って入ってるのに、分からなかったのがあ  
かん。じゃあ、次いくでー」

市果「…え、待って。すごいこと気づいた」  
桃「ん、何？」

市果、ノートに『いちか、ばちか』と  
書いて、見せて。

市果「はっちゃんも関係あるよ。市果とハチ

カ、じゃん」

桃「は？」

市果「ほら、はっちゃんが転校してきた日、私はっちゃんの苗字読み間違えたの覚えてる？ ハチカって」

桃「せやったなあ。ハチヤや言うてんのに」

市果「だからその、市果とハチカで、イチカバチカ」

桃「……」

市果「私とはっちゃんのための言葉みたい」

桃「……本気で言うてんの？」

市果「え、うん」

桃「じゃあ、そういうことにしといたるか。ちょっと待ってな」

桃、立ち上がり、前へ行って。

黒板の『日直』の下、空欄になっていた部分に『いちか ばちか』と書く。

桃「これで満足か？（とニヤけて）」

市果「うん。すごくいい」

○（回想戻り）同・同・同

黒板、『いちかばちか』の文字。

じっと見ている市果。

市果「（少しニヤけて）……」

そのとき、ドアがノックされて。

ドアが開き、顔を見せる麻美。

市果「……先生」

麻美「授業、する？」

× × ×

黒板に日本史の授業の跡。

江戸時代の用語などが書いてある。

教壇に麻美、机に市果。

市果「先生、日本史の先生でしたっけ」

麻美「国語よりこっちの方が向いてるかもっ

て自分でも思っちゃった。意外と覚えている

ものね」

市果「先生って……やっぱり先生なんですね」

麻美「どういう意味よ」

市果「いや、あっ、一個問題出していいです

か？」



麻美「なんでも任せなさい」

市果「鎌倉幕府が成立し——」

麻美「千百八十五年」

市果「え、なんで。『いい国つくろう鎌倉幕府』、じゃないんだ」

麻美「先生いくつだと思ってるの？ 私が学生の頃には、もう『いい箱つくろう』に変わってたよ」

市果「へえ、そうなんだ」

麻美「……ねえ、戸山さん」

市果「はい」

麻美「0組、楽しい？」

市果「……」

麻美「無理してない？」

市果「え？」

麻美「私、分からなくなってきたの」

市果「……」

麻美「このクラス……0組はさ、戸山さんが五組に戻るために始めた。ここで、しっかり勉強できるようにって。でも、それで良

かったのかなって」

市果「……」

麻美「私ね、怖いんだよね。教師一年目のとき、違う学校で三年生の副担任をしてたんだけど。担任の先生が病気になって、私が代わりをやることになって。いきなりで、どうしたらいいか全然分からなくて」

× × ×

回想。教壇にて表情が曇っていく麻美。

麻美の声「もともとヤンチャなクラスを、ベテランの先生が上手くまとめてた。でもその先生がいなくなった途端、私、何もできなくて。クラスをメチャクチャにした」

生徒たちがいる中、三つの空席。

麻美の声「気づいたら三人、学校に来なくなってた。イジメが起きてたの。でも、私、何もできなくて。気づいてたの、うん、気づいてた」

背を向け、黒板に書こうとする麻美。

チョークを持った指が震えている。

麻美の声「でも、見て見ぬふりをした。自分のことで精一杯で、気づかないふりしてた」  
× × ×

麻美「その三人は卒業できずに留年になって、一人は学校を辞めた」

市果「……」

麻美「同じようなこと、繰り返すのが怖くて……今になっても思い出すの。卒業式の日、みんなの冷たい視線を。お前のせいだお前がクラスを壊したんだ、って」

市果「（ポツリと）先生」

麻美「戸山さん、今、楽しい？ 0組で、良かった？」

市果「……先生。見てください、これ」

市果、桃の机の下の箱を取り、自分の机に置く。

中は大量の折り紙の作品。

市果「これ全部、はっちゃんが作ったんです。しかも、昨日一日で」

麻美「……？」

市果「私と喧嘩してる間に、こんなに……は  
っちゃんのこと、私全然分かってないんで  
す」

麻美「え？」

市果「はっちゃん、いつもは思ったことなん  
でも言うのに、昨日は言ってこなかったん  
です。私が教室に戻ってからも、黙って折  
り紙してて、絵を描いてて。横で私が勉強  
してるのを、黙って見てました」

麻美「……」

市果「私なんにも分かってなかったなって思  
いました。ああ見えてはっちゃん、すごく  
気を使えるんです。人の気持ちがよく分か  
るんです彼女」

市果、箱から折り紙の手裏剣を取って。

市果「これ」

麻美「（見て、ん？ と）……」

市果「手裏剣、作り方教えてって言っても全  
然教えてくれません。で、いつもこうやっ  
て」

市果、黒板に向かって手裏剣を投げる。

市果「（微笑んで）私に向かって投げてるんです」

麻美「……（微笑む）」

市果「いつも明るく振る舞って周りを笑顔にしてくれる。普通はそんなことできません。少なくとも、私にはできません」

麻美「……先生も、できない」

市果「自分のことかわいそうって私、思わないようにします」

麻美「……？」

市果「親が逮捕されるなんて、考えたことなかったです。社長ってかっこいいって馬鹿みたいに思っていました。こんなことになるなんて、想像できなかったです」

麻美「……」

市果「父が何をやったのか、私には分かりません。でも、悪いことしたヤツの子どもなんです、私」

麻美「……」

市果「そんな私が笑う権利なんて、ないと思  
ってました、みんなと一緒にになって授業を  
受ける資格なんてないと思ってました。悪  
い父を持った私はかわいそうって思ってま  
した」

麻美「戸山さん……」

市果「でも、先生のおかげで学校に来ること  
ができて……はっちゃんのおかげで、笑う  
ことができました」

麻美「……」

市果「はっちゃんと出会えて良かったです。」

0組があつて良かったです。先生には感謝  
しています」

麻美「……」

市果「許されるなら、まだはっちゃんと笑っ  
ていきたいです」

床に落ちている手裏剣。

○同・校門（日替わり、朝）

登校してくる生徒たち。

○町中の通り（朝）

市果、自転車で駆けていく。

市果「ヤバイヤバイ、遅刻……！」

○高校・0組教室・中

桃、自分の机の席に座り、市果の机の  
中に手を突っ込んでいる。

ドアが開き、現れる市果。

桃、手はそのままハツとして振り返り。

桃「わっ、おはよ」

市果「（肩で息をして）……おはよう」

桃「（手を引っ込めて）ウチ、なんもしてへ  
んで。なんも悪いことしてへんで」

市果、入ってきて。

市果「何したの？」

桃、市果の机から国語辞典を出し置く。

桃「これ、土日の間こっそり持って帰ってた。

ごめん」

市果「なんで？」

桃「調べたいことあってん……あれよ、イチかバチか」

市果「ん？」

桃「いっちゃんが怒って出てったとき、思ったんよ。ウチ、いっちゃんのことなんも知らんなって」

市果「……」

桃「前、いっちゃんがイチかバチかがウチらのための言葉や言うてたから、調べたらなんか分かるかな思ったけど、分からんかった」

市果「（少し笑って）……分かるわけないよ」

桃「そらそやねん、分かるわけないねん。これにいっちゃんの気持ち書いてあるわけないねん。でも、なんでもええから分からんかな思ってた」

市果「……なんか、分かった？」

桃「ウチといっちゃんは全然ちゃうってこと」

市果「（フツと笑う）」

桃「でもな、似てるところもあるで」



市果「何？」

桃、机の下の箱を机に上げて。

桃「勝手に触ったやろ、これ。あっこに手裏剣落ちてるもん」

桃、床に落ちている手裏剣を指さす。

桃「だから、お互い様やで」

市果「……ごめん」

桃「なんなら、いっちゃんの方が今日はマイナスやで」

市果「なんで」

桃「遅刻やもん」

市果「はっちゃんもこないだ——」

桃「ま、終わった話はもうええか。0組の特権やしな、遅刻しても許されるて。最高や」

市果「そうだ、先生は？」

桃「知らん。さっき来てたけどな。またいっちゃんのこと探してるんちゃう？」

市果「え、来てますって言いに行かないと」

市果、行こうとして。

桃、市果の腕を掴んで。

桃「まあええやん、勉強しとこや」

市果「……」

桃「二人でも大丈夫ってとこ、見せたるや」

市果「（桃の顔を見てハツとして）……」

○同・資料室・前々廊下

麻美、開いたドアから中を覗く。

麻美「戸山さん？ ……戸山さん？」

資料室、誰もいない。

ドア閉めて、廊下を早足で歩く。

麻美「（真剣な顔をして）……」

吉田、階段を下りてきて。

吉田「おっ、ちょうどいいところに。大迫先生？」

麻美、気づいて、止まって。

麻美「教頭先生。戸山さん見てませんか。まだ来てないんですけど」

吉田「戸山さんですか？ さっき走っていきのを見ましたよ、0組の方へ」

麻美「え、ほんとですか。良かった……あ、

走るのはダメか。注意しておきます」

吉田「よろしくお願いします」

麻美「では、戻ります」

麻美、背を向けようとする。

吉田「0組の件ですが」

麻美「……はい（と、向き直る）」

吉田「校長から、もう少し続けてもいいのではないかと話がありました」

麻美「えっ」

吉田「ああ、もちろん、五組の、他の生徒の受験勉強への影響を考えて、です。確かにクレームもありますが、天秤にかけた結果、0組を続ける方がベターだという判断です」

麻美「……」

吉田「ただし、条件付きで」

麻美「？」

○同・0組教室・中

市果と桃、机でそれぞれ生物基礎の教科書やノートを見ている。

桃、大きくクシャミをして。

桃「あー、生物苦手や。全部苦手やけど、特に苦手や」

市果「基礎だよ」

桃「基礎も応用もウチには関係ないねん。な、分かるやろ？」

市果「ん〜（と、首を傾げる）」

桃「うわ出た、勉強できるヤツの、できひんヤツを理解できませんって態度。腹立つわあ」

市果「始めからできたわけじゃないよ。やるからできるの」

桃「はいはい、そーですか」

桃、教科書を読み始める。

市果「……はっちゃん、折り紙、しないの？」

桃「折り紙？　せーへんわ今は」

市果「お絵描きは」

桃「やからせーへんて」

市果「なんで」

桃「なんでって、やりたいん？　ほな教えよか？　手裏剣の作り方」

市果「え、いいの？」

桃「かわいそうやん、勝手に触ってたぐらいやからな。でも、時間なくなるで」

市果「時間？」

桃「明日から、テストやんか」

市果「……テスト？」

桃「中間テスト」

市果「……？」

桃「いやいやいや、え、嘘やろ。嘘や。ずっと前に言うてたやんか。ウチが変な時期に引っ越してきて不利やから、他のクラスと時期ずらしてテストやろかって。それ、明

日やん」

市果「……本気？」

桃「なんで嘘つくねんな今。ほら、やるで」

桃、教科書を読み始める。

市果「……ねえ、本気？」

桃「（真剣な顔で読んでいて）……」

○同・校門

チャイムが鳴る。

○同・階段

真剣な顔で上がっていく麻美。

○同・0組教室・中

市果と桃、机でそれぞれ国語の教科書  
やノートを見ている。

桃は国語辞典も見ている。

市果「……トイレ行こうかな」

桃「行ってきい、行ってきい」

市果、立ち上がりかけたとき。

桃「待って、ええこと気づいたわ」

市果「ん？」

桃「ウチといっちゃんって、違うやん、似て  
ないやん」

市果「え、うん」

桃「市果は名前で、バチカ……八家は苗字や  
ん。そこも違うやん。やからいっちゃんが  
ウチらの言葉やー言うてるとき、正直ピン

と来んかってん。でもな」

市果「うん」

桃「イチカバチカの意味、覚えてるか？

（読んで）運を天に任せ、思い切りやってみること、や」

市果「……」

桃「イチカとバチカが、一緒になって、なんかやってんねん」

市果「ん？」

桃「いや、やから、違うけど、一緒やねん。似てないけど、一緒やねん。0組で協力して、どうなるか分からんけど、なんでも思い切ってやってみようってことや」

市果「……」

桃「え、響かん？」

市果「ちよっと……」

桃、頭を抱えて。

桃「そうかー、イマイチかあ」

市果「うん……でも、ありが——」

そのとき、ドアが開いて。

入ってくる麻美。

桃「あ、先生」

麻美「（ホッとして）……戸山さん」

市果「おはようございます」

麻美、教壇のところまで来て。

麻美「二人に、話があります」

○市果の家・市果の自室

机に太陽の光が差している。

机上、立てられている入学式の写真。

写真の中、笑顔の市果の顔。

○高校・0組教室・中

教壇の麻美。机の市果、桃。

麻美「先生、0組の担任じゃなくなりました」

市果「？」

桃「え、待って待って、どういうこと？ ク

ビ？」

麻美「（笑って）クビじゃない」

桃「え、じゃあ何？」



麻美「0組の担任制度がなくなったの」

桃「え、なんで？」

麻美「校長や教頭は、0組の運営方法に疑問を持っていた。今の状況だと、二人はまともに授業を受けられていない。私が時々様子を見に来てるだけで、それだと、塾の自習室と一緒に。学校とは言えない」

桃「……言われてみればせやな」

麻美「だから、三年生の先生で持ち回りにしようってことになりました」

市果「持ち回り？」

麻美「各科目の先生が、順番に0組を見るの」

桃「え、何それ」

麻美「その時間に授業のない先生が、0組に来て、授業をする。朝からずっとってわけにはいかないけど、これで、自習室のような状態ではなくなる……どう？」

桃「ウチ、ずっと大迫先生が良かった。トラップしてても折り紙しててもなんも言わんもん」

麻美「（笑って）うん、ありがとう。でもごめんね。こうするしか、0組を続けていく方法がなかったの」

桃「まあ、いっちゃんと一緒にやったらなんでもええわ」

麻美「戸山さんはどう？」

市果「……ありがとうございます」

麻美「ん？」

市果「0組をなくさないでくれて、ありがとうございます……私と、はっちゃんのために」

麻美「（市果を見て、微笑み頷く）」

桃「うーわ、いっちゃんもあれやな、ウチとずっと一緒におりたいんやな。かわいいなあ」

○同・同・外観

窓の向こう、麻美と市果と桃の姿。

桃「な、先生？」

麻美「来週からそうなるので、二人とも、よ

ろしくね。でもその前に、明日からテストよ」

桃「ほどほどに頑張るかあ。一緒にな」

市果「先生」

麻美「どうしたの？」

市果「トイレ行ってきていいですか？」

麻美「うん、行ってらっしゃい」

○同・同・前々廊下

教室から出てくる市果。

ドアの『3年0組』のプレート。

市果「（見て、少しニヤリとして）……」

市果、軽い足取りで廊下を歩いていく。

桃のクシャミの音が微かに聞こえる。

（了）